

## ■ 本文

かくのみ思ひくんじたるを、心も慰めむと、心苦しがりて、母、物語など求めて見せ給ふに、げにおのづから慰みゆく。紫のゆかりを見て、続きの見まほしく覚ゆれど、人語らひなどもえせず、たれも〔①〕いまだ都慣れぬほどにて、え見つけず。いみじく心もとなく、〔②〕ゆかしく覚ゆるままに、「この源氏の物語、一の巻よりして、みな見せ給へ。」と、心の内に祈る。

親の太秦にこもり給へるにも、こと事なくこのことを申して、出でむままにこの物語見はてむと思へど、見えず。いと口惜しく思ひ嘆かるるに、〔③〕をばなる人の、田舎より上りたる所にわたいたれば、「いとうつくしう生ひなりにけり。」など、あはれがり、めづらしがりて、帰るに、「何をか〔④〕奉らむ。まめまめしき物は、まさなかりなむ。ゆかしくし給ふなる物を奉らむ。」とて、源氏の五十余巻、櫃に入りながら、在中将・とほぎみ・せりかは・しらら・あさうづなどいふ物語ども、一袋取り入れて、〔⑤〕得て帰る心地のうれしさぞいみじきや。

〔⑥〕はしるはしる、わづかに見つつ、心も得ず、心もとなく思ふ源氏を、一の巻よりして、人も交じらず、几帳の内にうち伏して、引き出でつつ見る心地、〔⑦〕後の位も何にかはせむ。昼は日暮らし、夜は目の覚めたる限り、灯を近くともして、これを見るよりほかのことなければ、おのづからなどは、そらにおぼえ浮かぶを、いみじきことに思ふに、夢に、いと清げなる僧の、黄なる地の袈裟着たるが来て、「法華経五の巻を、とく習へ。」と言ふと見れど、人にも語らず、習はむとも思ひかけず。

(注) 思ひくんず=ふさぎこむ。紫のゆかり=『源氏物語』で紫の上に関わる巻々。太秦=広隆寺。をば=叔母。櫃=ふたつきの箱。在中将・とほぎみ・せりかは・しらら・あさうづ=当時の物語の名。はしるはしる=心がはやって。几帳=室内の仕切りの布。後の位=皇后の地位。)

## ■ 設問 (全20問)

1. 「紫のゆかりを見て、続きの見まほしく覚ゆれ」の「まほしく」の文法的意味（助動詞の意味）を答えよ。
2. 傍線部〔①〕「たれも」とあるが、ここでは誰も彼もが（家族の誰もか）どのような状態であったことを言っているのか、本文に即して説明せよ。
3. 「いみじく心もとなく」の「心もとなし」の意味を答えよ。
4. 傍線部〔②〕「ゆかしく」の意味として最も適切なものを次から選べ。  
(ア) 見たくてたまらない (イ) 恐ろしい (ウ) 不思議だ (エ) 上品だ
5. 「見はてむと思へど、見えず」の「見えず」とは、誰が何をどうすることができなかつたのか、説明せよ。
6. 傍線部〔③〕「をばなる人の」の「なる」は、どの助動詞の何形か。文法的に説明せよ。
7. 「あはれがり、めづらしがりて」とあるが、叔母が作者に対してどのような気持ちを抱いたのか、説明せよ。

8. 傍線部〔④〕「奉らむ」について、次の小問に答えよ。
- (1) 「奉ら」は誰から誰への敬意を表す敬語か。種類（尊敬・謙譲・丁寧）も答えよ。
  - (2) 「む」の文法的意味を答えよ。
9. 「まめまめしき物は、まさなかりなむ」を現代語訳せよ。
10. 作者が叔母から譲り受けた「源氏の五十余巻」を、作者はどのような様子で読んだか。本文の語句を用いて二点挙げよ。
11. 傍線部〔⑤〕「得て帰る心地のうれしさぞいみじきや」を現代語訳せよ。
12. 傍線部〔⑥〕「はしるはしる」とは、ここではどのような気持ちで読むさまを表すか、簡潔に説明せよ。
13. 「人も交じらず、几帳の内にうち伏して」という描写から読み取れる、作者の読書への態度を説明せよ。
14. 傍線部〔⑦〕「後の位も何にかはせむ」について、次の小問に答えよ。
- (1) この一文を現代語訳せよ。
  - (2) ここで用いられている表現技法（修辞）を答えよ。
  - (3) 係助詞「か」を受けて結びとなっている語を抜き出し、その活用形を答えよ。
15. 「昼は日暮らし、夜は目の覚めたる限り」を現代語訳せよ。
16. 「おのづからなどは、そらにおぼえ浮かぶ」とは、源氏物語のどのような状態を言っているのか、説明せよ。
17. 「まさなかり（まさなし）」の意味として最も適切なものを次から選べ。
- (ア) よくないだろう (イ) 正しいだろう (ウ) めったにない (エ) みつともよい
18. 夢に現れた僧は作者に何を勧めたか、また作者はそれをどう受け止めたか、本文に即して答えよ。
19. この場面全体から読み取れる、少女時代の作者（菅原孝標女）の人物像・心情を、四十字程度で説明せよ。
20. 『更級日記』の作者を漢字で答えよ。また、作者が伯母にあたる人物が書いたとされる、平安時代を代表する女流日記文学の作品名を一つ答えよ。